

〈小さいヒーロー〉から〈戦うヒューマニスト〉へ

——小川未明「眠い町」論——

小 椋 裕 二

小川未明の童話「眠い町」は、「日本少年」大正三年五月号に掲載された。明治四三年一月、すでに未明は二十八歳で最初の童話集『赤い船』（京文堂書店）を刊行していたが、その後は小説に力を注ぐようになる。第一童話集『星の世界から』（岡村書店）が刊行されるのは、『赤い船』刊行後八年経った大正七年一月のことである。『星の世界から』以後、童話の執筆は盛んになるから、「眠い町」は未明が小説に主軸を移した時期と、童話作家として盛んに活躍しだす時期との中間に書かれた数少ない童話の一つといえる。内容から言っても、自然破壊や環境破壊を題材とした「眠い町」は、未明童話のなかで特殊なテーマを扱っている。この時期、未明がすでに今日の環境問題につながる発言を行っていたこと、明治一五年生まれの未明が新潟の高田から一九歳の時に上京し、一人の都市移住者として、都市と地方の近代化のありようを冷静に見続けていたことに驚かされる。

小川未明は小説家であり童話作家である。大正一五年にいわゆる〈童話作家宣言〉を行い、以後、童話に専心するまでは、小説と童話を両方書いてきた。とりわけ大正中中期から後期にかけては、一方であたらしい童話文学の創作を行い、一方で都会にあつては資本家と労働者の関係、田舎にあつては地主と小作人の関係における階級社会の断絶や矛盾を有した日本で、本格的に始まった社会改造の動きに呼応し、未明も社会主義をふまえた小説を書くようになる。社会改造を願う未明の小説の重量が重くなればなるほど、未明の童話は輝きを増していった。実際、今日知られている未明童話の多くは、大正中中期から後期にかけて書かれたものが多い。その意味で、小説と童話の関係は、未明文学の場合、密接な関係を有している。「眠い町」の特質も、小説との関連において捉えられるべきであろう。

未明の小説に、時代や作者のコンテクストが影響を与えているのは明らかだが、童話はどうであろう。宮沢賢治の童話に見られるような、生きものの〈修羅〉の問題を描いた普遍的なテーマは、未明童話には見られない。未明童話の場合、童話のフィクションの向こう側には、意外と近い位置に現実世界が身を寄

せている。時代の現実を童話の言語で翻案したものが未明童話であるといつてよい。小説に影響を与えた時代や作者のコンテクストが、童話世界にあつても形をかえて影響を与えている。なかでも「眠い町」には、時代の意識や未明の思いが分かりやすいかたちで表されている。

未明には、社会や人間の現実を鋭く深く捉えようとする目とそこに希望や光を見出だそうとする目がある。主に前者は小説となり、後者は童話となった。一方、未明には、この二つの目とは別に、正義を貫こうとする思いとあるがままの世界を受け入れようとする思いもあつた。主に前者はヒューマニズムやアナーキズムの文学となり、後者はロマンチズムや無常の文学となった。右の、二つの目と二つの思いによって構成される座標軸のなかに、個々の未明作品は位置づけられる。特に後者の二つの相反する思いの矛盾と調和が、未明文学に独特の彩りを添えるものとなっている。「眠い町」にも、この二つの相反する感情は認められよう。

本稿では、「眠い町」をその内部の言葉に限って解釈するのではなく、時代や作者のコンテクストのなかで捉えてみたい。そうすることで未明童話がもつ独自の彩りの細部に光を与えることができる。五〇年以上にわたり書き続けられた約一二〇〇編の未明童話は、書かれた時代によってそれぞれ様相が異なる。各時代の未明童話の特質をあきらかにするには、まだなお時間がかかろうが、いずれにせよテクスト・時代・作者の關係のなかで未明文学を捉えていく必要がある。

二

「眠い町」は次のような話である。少年ケーは（眠い町）と呼ばれる不思議な町へやってくる。旅人がこの町へやってくる、しぜんと眠りこんでしまうが、ケーもまた同様に眠ってしまう。しかし眠ったケーは、老人に起こされる。老人はケーに次のような頼みごとをする。

私はこの世界に昔から住んで居た人間である。けれど何処からか新しい人間がやつて来て、私の領土を皆な奪つてしまつた。そして私の持つて居た土地の上に鉄道を敷いたり汽船を走らせたり、電信をかけたたりして居る。かうして行くと、いつかこの地球の上は一本の木も、一つの花も見られなくなつてしまふだらう。私は昔から美しいこの山や、深林や、花の咲く野原を愛する。今の人間は少しの休息もなく、疲れと言ふことも感じなかつたら、瞬く間にこの地球の上は沙漠となつてしまふのだ。私は疲労の沙漠から、袋にその砂を持つて来た。私は背中にその袋を負つて居る。この砂を少しばかり、どんな物の上にも振りかけたなら、その物は直ぐに腐れ、錆び、若しくは疲れてしまふ。で、お前にこの袋の中の砂を分けてやるから、これからこの世界を歩く処は、何処にでも少しづつ、この砂を撒いて行つてくれい。

ケーは老人の頼みをきき、疲労の砂をもつて地球を旅し、各所で砂をまく。だがやがて砂がなくなり、（眠い町）に戻つて

みると、そこには大きな建物が建ち並び、煙が空にみなぎっていた。この有り様を見たケーは、驚きの眼をみはる。

老人は、「新しい人間」が「鉄道を敷いたり汽船を走らせたり、電信をかけ」るので、「美しいこの山や、森林や、花の咲く野原」は「沙漠」になってしまおうという。都市化や近代化の強力な作用で、山は崩され、レールが敷かれ、自動車が行くこととなった。「疲労の沙漠」の砂を背負ったケーは、都市化・近代化の行き過ぎの場面に会おうと、砂を撒く。すると山から切り出された大木を運ぶ鉄道レールは錆び、小僧を轆きかけた自動車は止められ、働きづめの人足には休息がもたらされる。「眠い町」は、田舎が都会化し、自然が文明に奪われる話であり、地方の都市化、自然の文明化に対する警鐘を鳴らした作品である。さらに、砂が無くなり、少年が「眠い町」に戻ってみると、その町も「大きな建物が並んで、煙が空にみなぎ」り、都市化・近代化の波に侵されていたとあるから、都市化・近代化の足取りは、人が思う以上の速さで世界を席捲しているということを伝えたいものといえる。「眠い町」は、ひとまずそのように読める。

「眠い町」に示された自然破壊・環境破壊への警告は、同時に、近代人の虚偽の生活を批判したのもでもある。「眠い町」が発表された同年、未明は「無智」(第三帝国)大正三年一月一〇日)という小説を発表している。そこには次のようなことが書かれている。著述家Sは、新聞に、ある労働者が作業中、火薬の爆発で死を遂げた記事を読む。紙面の上には、金持ちが結婚した記事もあった。金持ちと貧乏人に人間として差別はない。にもかかわらず人は高級生活を羨む。人生のための文明であり、社

会である。富者のための社会でも文明でもない。このことが理解されていない。人生に階級はない。それがあろうと思うのは無智だからだ。

未明は、一人一人の人生のための文明であり、社会であるはずなのに、その関係が逆になっていることを訴えている。人に階級はなく、階級に縛られることのない自由を求めよと述べるのである。同様のことは、小説「酒場」(「読売新聞」大正三年四月二七日)でも語られる。日は新聞を見て、都会で凍死した人がいることを友人に話す。人はみな、人道は大切だと言う。にもかかわらず都会で餓死する人がいる。この文明の都会において。不思議なことだと。

近代人は、自分たちが虚偽の暮らしをしていることに気づかないと未明は言う。物質的豊かさばかりを求め、そうした生き方の蔭で犠牲になっている人のことを考えようとしなさい。都市化や近代化は、文明や社会が個々の人間のためにあることを考えない人間の行いとして捉えられる。「眠い町」は、そうしてみると、自然や環境の破壊を述べつつも、一方で、人間本来の生き方を見失い、金や物質的豊かさだけを求める人間の暮らしを戒める作品と読めよう。

未明の目は、日本だけに向いていたのではない。世界を旅するケーは、「疲労の沙漠」の砂を全世界にまく。都市化・近代化・階級社会の問題は、日本に限ったことではないからだ。同じことは、国家権力が個人の自由を束縛する場面でも起こっていた。「眠い町」が書かれたのは大正三年であるが、その年は第一次世界大戦がはじまった年でもある。近代化が人間にもたらす抑

圧や疎外は、戦争における個人の自由の束縛と共通する。

「欧州戦争観 小数の自我に味方せん」〔「文章世界」大正三年九月〕のなかで、未明は暴力の前に正義が蹂躪される時代の到来を憂え、自身を（戦うヒューマニスト）たらんと決意している。

世界には戦争を喜び、死を何とも思つてゐない人間が平和を好む人間よりも多い（中略）。

自我が戦争を否定しながら、尚ほ戦争に赴かなければならぬ人間程不幸の者はない。多数の前にありては、常に少数の意志は圧迫せられるのが常である。暴力の前にあつては常に正義が蹂躪せられて来た。

（中略）トルストイはよくひとりで、自己の博愛主義のために露国と戦つた。芸術家は常に少数の自我を代表して戦ふヒューマニストでなければならぬ。真理のために殉じなくてはならない。

ある大きな力が自分たちを押し倒そうとしている。そういう時代の到来を未明は予見していた。虚偽の暮らしに気づかない「新しい人間」が作りだすその力は自然を破壊し、人の自由を奪っていく。その圧倒的な力を前にすると、目を瞠るしかない。「眠い町」を読む者が結末で読み取るべきは、少年ケーが（戦うヒューマニスト）として現実世界にもう一度戻り、真理のために働く姿である。

三

ケーが向かつた（眠い町）には具体的なコンテクストの指示はない。だが、未明はある場所をコンテクストとして思い描いていたのではないか。（眠い町）は、童話のなかでは抽象化された町であるし、そう読むのが適当であるが、未明の生まれ育つた地を「ねむい町」と呼んでいた文章があることに注目したい。「眠つてゐるやうな北国の町 私の郷里」〔「文章倶楽部」大正一〇年一月〕において未明は次のように記している。

一体、高田といふところは、活気に乏しい。寺が沢山で森が多くて、煙突が少く、維新この方、幾十年の長い間、眠るやうな所であつた。中学にゐる時、英語の教師が生徒に向つて、その時分は未だ町であつた高田を形容して「ねむい町」といつたことがある。今だに私の頭に残つてゐる。（中略）東京へ来てから後に、高田に師団が設けられて、町が變つて市となつた。それで子供の時分に小学校へ行つた時、通つた町はどうなつたらう、或は七つ八つの頃、鬼ごとをしたり、独楽をまはして遊んだ村はどうなつたらうと思ふことが、長い間であつた。或る年に帰つてみたが、昔、鞆を下げて学校へ出た道、又祖母に連れられて、頭痛の禁厭をしてお寺へいつた通など、大分變つてしまつてゐた。（中略）蜻蛉を釣つた桑畑や、隠れ鬼をした森などは開かれて、そこに大きな建物立つてゐる。

右の引用の前半部分に、「ぬむい町」という言葉は未明が高田中学在学中に、英語の教師の口から聞いた言葉として紹介されている。「眠い町」が喚起する社会問題の射程はグローバルなものだが、別の見方をすれば、ローカルな問題を出発点にした作品であるともいえる。さらに、右に引用した文章の後半部分では上京した未明がその後、高田の町に陸軍第十三師団が設けられ、町が変化したさまを記している。とすれば、高田の町の変貌を、「眠い町」はコンテクストの一つにもついていたと考えることができる。

太平洋側の近代化の過程で北国の町が（眠い町）と化し、その後、日本海側の近代化の過程で（眠い町）が無くなっていくさまを、日本海側と太平洋側の近代化の力学から説明したものに、古厩忠夫の『裏日本―近代日本を問いなおす―』（岩波新書、一九九七年九月）がある。氏は次のように述べている。

産業革命は資本・労働力・エネルギー資源など、いわゆる資本の本源的蓄積を前提とする。植民地をまだ獲得していなかった日本にとっては、国内農村地帯からの蓄積が必要不可欠となる。それは、内国植民地北海道から九州・沖縄にいたる全国に及んだが、太平洋ベルト地帯と脊梁山脈を挟んで位置する裏日本は絶好の後背地と目され、ヒト・モノ・カネの移転システムが、表と裏の明確な対照性をみせつつ形成されていった。（二六頁）

人口面での「裏日本」化、つまり資本主義化への巻き込ま

れ方は、東北より北陸・山陰の方が著しく、とくに日本一の人口大県だった新潟県は人口流出の時代を迎える。流出の第一のパターンは、農家の次三男を中心とする東京・大阪など大都市への流出である。（四五頁）

裏日本にとって大正期はデモクラシーの面だけでなく、周回遅れの感はあるものの、明治期に待望してやまなかつた鉄道・港湾など社会資本の整備がおこなわれ、そして対外的にはシベリアブームで日本海の対岸への「期待」が膨らみ、さまたまな夢が語られた時代でもあった。（五八頁）

山一つ隔てた東京・大阪・名古屋の裏庭、ヒンターランド（後背地）たる北陸の場合は、産業化の波及効果を受けて従属的な形で工業が発展するという側面をも有した。（六四―六五頁）

古厩は、日本の近代化の過程において、太平洋側の町が都市化していくために、日本海側の町の人、カネ、モノが資本として利用され、徐々に日本海側の町や村が疲弊していくさまを説明している。日本海側の資本が奪われ、太平洋側の人々の暮らしたの格差が意識されるようになったのは、いつのことなのか。それは「裏日本」という言葉が人々の意識に浮上してくる時期のことであるが、氏はその時期を次のように記している。「立ちおくれが太平洋側との、「表と裏」という構造的な格差として認識されてくるのは日清戦後のように思われる。」（七九―八〇頁）

日清戦争が起る明治二十七年は未明一二歳のときである。未明の青年時代は、日清・日露戦争の間にあったが、その間は未明の愛国心や正義心が育まれていく時期であったと同時に、故郷の暮らしが徐々に痩せていくと感じる始まりのときでもあった。未明は若い心で故郷の町がやせ、ひっそりと（眠い町）になっていく過程を見ていたことになる。そしてその落差は、上京した未明が東京の人々の暮らしや都会化された町のありようを見たとき、さらにはつきりと意識されることとなった。

ところで日本海側が太平洋側の近代化・都市化の波及効果をうけ、「周回遅れ」で近代化していくのは明治時代末から大正時代にかけてである。

同じく『裏日本』には次のような指摘がある。

日本の新潟県でも関川水系の電力を背景とした日本亜鉛（大正四年）・日本曹達（二本木工場（大正九年）のほか、電気化学青海工場（大正一〇年）、新潟水力発電関連の北越製紙（大正三年）・新潟紡績（大正六年）・新潟硫曹（同）・新潟醋酸（同）などが設立されている。

第一次大戦期は北陸重化学工業の勃興期であった。（六七頁）

『上越市史（普及版）』（平成三年一〇月、上越市）には次のように書かれている。

電力（明治四〇年、上越電気会社開業・小笠注）の需要は

当初少なかったが、電力が豊かであるということが有力な案件の一つとなつて、高田に第十三師団が設置（明治四一年・小笠注）されたり市制も施行（明治四四年・小笠注）されて各種の産業も興り、電力需要も増加した。その後も、この安くて豊富な電力が要因になって多くの工場が進出し、農村の機械化も進んで電力の需要が急増したので、関川水系には次々と発電所が建設された。（二二二頁）

高田の町の変貌は、とりわけ陸軍第十三師団の軍隊の設置が大きな働きをした。

旅館や料亭などは、将校たちの宴会や宿泊を見込んで、競って近代的な洋風建築を進めた。（中略）その他、銀行・市役所・警察などの諸官庁もしだいに洋風に建て替えられ、軍の施設である師団長官舎や借行者などにも洋式建築が取り入れられた。（二二二頁）

この人口急増と軍隊の消費を巡って、町の商工業はにわか
に活況を呈した。長岡銀行・直江津銀行・北陸銀行などが支
店を設置し、第三百三十九銀行は増資をした。また、高田商業
銀行が新しく開店した。

東洋ブレード、丸三製茶、高橋運送・高田建物、上越煙草
などの会社が設立された。また、各地から靴屋・写真屋・洋
服屋・青物屋などが入り込み、町は好景氣にわきたつた。（二
二二頁）

大正二年には、北陸本線、直江津・米原間が全通する。上越自動車会社が設立され、乗合自動車が走ったのもこの年である。大正三年には頸城鉄道、新黒井・下保倉間が開通している。こうした変化のなかで、市民生活も高田の町も変貌していった。「少年時代の回想とAの運命」(「新潮」大正二年二月)のなかで未明は次のように書いている。

私は、二三年前に国へ帰つた時に、自分の生れた土地を久し振りに訪うて見た。(中略)

国を出てから僅か十二三年の間に、其の辺りはすっかり變つて居て、しめつばい五月の空には眠いやうな太鼓の音が聞えて、私の眼の前には新しくできた妓楼の屋根が重なり合つて聳えて居た。そして嬌艶しい色彩を放つた着物などが窓の側に掛けてあつたりなどして、総べての私の懐しい夢を打壊してしまつた。

このように見てくるなら、老人から「疲労の沙漠」の砂を預かり、世界を旅しながら、その砂をまいた少年は未明自身のように読めてくる。都市生活者となつた未明は「無智」や「酒場」等の小説という砂をまくことで、人間本来の生活に戻ることを訴えてきた。都会に住むことになつたがゆえに、自らが育つた地方が疲弊していく推移がよく分かり、文明化・近代化がもたらす負の活動を押しとどめようとした。

「眠い町」において、〈眠い町〉がなくなることは、近代化の動きの強力で素早い力を意味するが、未明自身の思いに立ち

返つて解釈するなら、近代化の早さに驚くというより、未明の故郷にケ―を立たせ、その変貌を近代史の流れのなかで捉え、〈眠い町〉が〈眠い町〉でなくなつた故郷の現実を描くために、「眠い町」は書かれたと読めてくる。故郷の喪失という驚きを「眠い町」は語つていたのではなからうか。

こうした現状を受けとめ、未明は以後、作家活動が続ける。未明の〈砂〉は、つきたわけではない。その〈砂〉は大正中期から後期にかけて、もつと熾烈にまかれるようになるし、社会改造をもとめる思いは童話世界にも投影され、〈童話作家宣言〉をおこなつた昭和以後も、童話を通じて、自らの思いを訴え続ける。人間を押し流す全世界に広がる大きな力の存在や故郷の喪失を乗り越えるかのように未明の以後の文学活動は続けられる。

四

「眠い町」と同じころに書かれた童話に「青い時計台」(「処女」大正三年六月)がある。あらずじは次のとおりである。

さよ子は毎晩、町から聞こえてくるよい音色に耳を傾けた。青い時計台の中でおじいさんを囲み、姉妹三人が演奏をしていた。さよ子は世間には、楽しく美しい家庭があるものだと思つた。だがある日、その音色がかなしく響いてきた。おじいさんが病氣になつたのだ。その後、またにぎやかな音色が聞こえるようになる。行つてみると、若者達がまじつて楽し

そうに演奏をしていた。だがおじいさんの姿はなかった。秋になり、音色が聞こえなくなった。行ってみると売り家になっていた。

この童話でも、「眠い町」と同じく、幸せな家庭が徐々にかたちを失っていくさまが描かれている。だがここに語られるのは、近代化の作用の問題ではない。それがまるで自然なことであるかのように、人や家庭の幸せは変化していく。無常の思いでこの童話は書かれている。ひと月違いで発表された「眠い町」との対照性は鮮やかである。すでに述べたように、未明のなかには二つの相反する感情があった。あるがままの自然を受けいれようとする気持ちと、人間を疎外するものに対して戦っていかうとする気持ちである。「正義」と「無常」という言葉で表してよい二つの気持ちは未明のなかで矛盾と調和を見せながら未明独自の文学を創り出していく。

だが考えてみれば、近代化の大きなうねりが「眠い町」を飲み込んでしまうことと、無常の時の流れがすべてのものの形を失わせることには大差がない。近代化のうねりに対しては戦うすべがあっても、時の流れには立ち向かえない。だからこそ未明は一方で「動の気持ち」をかき立て、一方で「静の気持ち」で事態を静観しようとしたのである。だがまた抗えない大きな力の働きがあるからこそ、限られた命を力の限り生きてみようとする未明の思いも生じた。「戦うヒューマニスト」としての未明は、つねに二ヒリズムを背後に控えている。

「三月」〔文章世界〕大正三年三月」という小説は次のよう

な話である。

毎年春が来ると、あの橋の上に立った。都会に来て長い。私は日々の暮らしに戦い疲れた、顔色の青い浮浪者としてその日その日を生きる労働者のひとりである。三年前は、ある新聞社の夜勤記者をしていた当時のことを思い出した。生活の苦しかった時分だが、今のほうがもつと心が冷たくなっている。何を見ても悲惨で醜悪であった。去年は、都会がいつか滅びると思っていた。始めあるものには必ず終わりがあつた。今年は橋に立てそうもない。今私は病院に寝ている。

始めあるものには必ず終わりがあつたという認識は、ここでも語られている。人も町もみんな変わる。変転する人の運命のうちに、すべては変化していく。そういう童話として「眠い町」の結末を読むこともできよう。「眠い町」がなくなるのは、自然の摂理、時の流れの当然の帰結であると読んでもおかしくない。

「少年時代の回想とAの運命」〔新潮〕大正二年二月〕に、未明が幼いときによく遊んだ友達Aの死が語られる。一緒に東京に出た友達の中には、すっかり暮らしているものもいるが、その友人は、肺病にかかり、絶望して房総半島の沖で船から身をなげた。その幼馴染Aの運命をふまえ、未明は次のように述べている。

幸福に楽しく暮して行く者もあるのに、其の日くを貧困

に苦痛に喘ぎつゝ送らなければならぬ者もある。そしてそれ等の者も十数年前の子供の時に溯つて見れば、等しく美しい自然の下に住み、自然に対し、人間に対し、愛着と信仰とを持つて居たことを思はしめる。私は此の人生の矛盾と幼年の回想に、限りなき不安と哀愁と懷疑とを感じない訳には行かない。そして、自分の書く芸術に、自分の子供の時代の記憶、生れた郷土の色彩、それ等を再現することが出来るならば、私の感情の或る物はそれに満足出来る。

未明が描く故郷の自然は、変貌する前の故郷の自然である。都会に出て、命を失った友人が子供時代を楽しく送った自然である。無常の時の流れのなかで形を失うまえの原型として未明の故郷はある。

同じころに書かれた小説「血に染む夕陽」(「太陽」大正三年九月別)にも、苦境に沈む主人公と学校時代の友人Aの死の話が登場する。生死をつかさどる力を考えると恐ろしいと主人公は言う。一日早く死ぬことも、遅れて死ぬことも、無窮の暗黒からすれば変わりはない。そんな折り、主人公の身代わりになつたかのように、道を通つていた小僧が事故で死ぬ。運・不運の巡り合わせにおいて自らが不運でなかつたことを主人公は喜ぶ。あるとき故郷の母から手紙が届く。なぜお前は田舎のことはかり書くのか、なぜ陰気な、滅入るようなものしか書けないのかと。「血に染む夕陽」においても、生れた郷土の色彩や子供時代の記憶に、愛着と信仰を託そうとしていることが分かる。

五

「眠い町」は近代化の波に浸食され、やがてのみ込まれていく地方の町の現実を描いているが、老人が「実は私がこの眠い町を建てたのだ」と述べているように、〈眠い町〉が自然発生的にできた町ではなく、そうあるべく強いられた町であったものを、そうあるように建てた町として未明が書きなおしていることに留意すべきであろう。

その町は、人の疲れをいやし、人に安眠を与える町である。その価値を未明は十分知っていた。そうした町の価値が、今日ますます輝きを放っているのはいうまでもない。砂がなくなり、〈眠い町〉がなくなつても、「疲労の沙漠」から砂をもつてくれれば、〈眠い町〉はできる。近代化や都市化を目指すだけでなく、〈眠い町〉に暮らし、〈眠い町〉を通して都会の人々に大切なものを思い出させ、ゆったりとした眠りを与える癒しの町であることを誇りに思う生き方が大切にされる時代は近い。

未明は「私の最も愛する自然、心を惹かれるのは滅び行く景色」(「新潮」大正四年八月)の中で次のように述べている。

山が鋭く尖つたような景色にひとりで対するのは、寂寥に堪えられない気がする。私の趣味は、人間が生活を営んでいる部落の夕暮れの景色のようなどころにある。人間が自然に勝つて生活している景色も、自然が人間を征服している景色も興味がない。人間も自然ともに疲れているような傷ついているような景色が好きである。暗く陰気であるが、そのな

かに何か人を惹きつける魅力のある景色が好きである。

未明自身（眠い町）に人を惹きつける魅力があることを知っていた。人が自然とまどろみ、白昼夢を見るような場所の価値を未明が知っていたのは、かつてそこに暮らし、今は都会に暮らしているからであろう。未明は「田舎から帰って―最後の一節は本間氏に」（『読売新聞』大正四年五月二日）で次のように述べている。

私は田舎の人は不平も言はずによくかうして黙つて働いてゐると思つた。彼等が宿命に安んずるためか、それとも無智なるがためか。しかし私にはこの惑はない生活を幸福であると思はずにはゐられなかつた。

都会には目を娛ましめ、耳を娛ましめるものがあるけれど、心を娛ましめ、休ましめるものがない。田舎には目を娛ましめ、耳を娛ましめるものが少くても心を娛ましめ、休ましめるものがある。（中略）私にはランプの燈火がそんなに暗くないふ気持はしなかつた。私には電燈がなくても不自由を感じないと思つた。恐らく汽車がなくてもそんなに苦痛を感じないであらう。（中略）自然は其の姿のやうな人間を産むものである。人間はいつしか自然の感化を受けて其の形のやうな性格を造るものである。なぜ私は日本アルプスの麓に産れて来なかつたらうかと思つた。私は小さいながら、ヒーローたらんことを欲する。

ここで未明が述べている「無智」という言葉は、小説「無智」の「無智」とは異なる意味で用いられている。不平もいわず働いている田舎の人々の惑わない暮らしを「幸福」と捉えている。都会には目を樂しませるものはあるが、心を安らわせるものがない。未明は「人間はいつしか自然の感化を受けて其の形のやうな性格を造る」と言う。「日本アルプスの麓に産れ」、「小さいながら、ヒーローたらんことを欲する」と書いているが、「眠い町」の少年ケーはまさにそうした（小さいヒーロー）の形象であつた。世界を旅し、「疲労の沙漠」の砂をまき、人々に心の安らぎを与える存在となることは、自然の感化を受けた未明の夢であつた。

大正三年に発表された小説を見ると、未明の生活は経済的に困窮していたばかりでなく、小説の執筆や生活の不安から、精神的にも追い込まれていたことがうかがえる。先に引用した「三月」―「血に染む夕陽」からもその傾向は読み取れるが、同年八月から九月に「東京朝日新聞」に連載された「石炭の火」の空想画家の死にも同様の思いを読み取ることができる。小説「ペストの出た夜」（『読売新聞』大正三年六月二日）は次のような内容である。

清吉が夜遅く帰つてきて新聞を見ると、近くの町からペスト患者が出たことが書いてあつた。彼は襲われるやうな寒気がした。一日も早くここから引越しをしなければならぬ。さっそく薬屋へ鼠捕薬を買に行つた。あなたみたいに恐ろしがる人はいないと妻は言つた。子供は学校を休ませた。清

吉の神経はますます病的になっていった。

こういつた当時の経済的・精神的苦境が未明を童話執筆に向かわせ、〈小さなヒーロー〉となる夢を抱かせた。それまで小説世界・現実世界で〈戦うヒューマニスト〉として生きてきた未明は、童話において〈小さなヒーロー〉の夢を生きようとした。人に休息を与えるヒーローの形象を通して、未明は童話の中で安らぎを得た。〈小さいヒーロー〉は「眠い町」の結末で再び大きな現実につきあたるが、童話世界で疲れを癒した未明は、〈小さいヒーロー〉から〈戦うヒューマニスト〉へと再び姿を変え、現実世界・小説世界に戻っていく。その決意を固めるためにも「眠い町」の童話世界は有効であった。

注

1 『赤い船』刊行以後に発表された未明童話は、明治四四年なし、明治四五年一編（燕）、大正二年なし、大正三年四編（野を越えて）「眠い町」「青い時計台」「不死の薬」、大正四年二編（黒い旗物語）「未だ見ぬ町へ」、大正五年三編（残された日）「何処で笛吹く」「秋逝く頃」である。

2 「眠い町」が掲載された「日本少年」は大正時代を代表する少年向けの総合雑誌である。この雑誌には、冒険物や探検物が多く載せられた。紅野敏郎によれば、「日本少年」は「歴史、理科の記事に力点が置かれ、また西洋の文化と風土、登山や冒険の話」を然るべく伝える工夫が常になされていた（「解題」三「日本少年」

総目次』雄松堂、マイクロフィッシュ版、早稲田大学図書館編、精選近代文芸雑誌集201、平成一七年七月）。「眠い町」が掲載された同誌同年三月号では「探検号」と題した特集が組まれている（もしも余が探検するならば「大探検家スタンレー」「樺太鞆の探検家間宮林蔵」「海上探検王コロンプス」等の探検談の他、有元芳水「炮烙島探検記」、松山思水「絶海の少年」、三津木春影「噴火魔島」の探検小説、などが掲載されている）。「眠い町」は、「日本少年」の読者の嗜好をくんだ童話という側面をもっていることが分かる。

3 『小川未明全童話』「I概説」（小笠裕二編、日外アソシエーツ、平成二四年一月、童話集収録頻度表）六頁）

4 「創作楽屋ばなし」（「文章倶楽部」大正一三年七月）という感想の中で、未明は自身の中に「矛盾した二つの気持ち」があることを述べている。一つは「現実相のわずらはしさから遠ざかつて、自由に、自然なり人生なりを味つて見たい気持」「ニヒリスティックな静寂を求める心」であり、もう一つは「飽くまで正義を標榜し、現実の不正と不合理とに対して戦つて行かう、それに絶えず反抗して行かうと云ふ心」であるという。未明はこの「静の気持」と「動の気持」が「常に矛盾しながら、また調和しながら、私の生活を支へて居る」と言う。未明文学の初期のネオ・ロマンチズムは前者の傾向が、その後、社会主義に傾いていく大正中中期以降は後者の傾向が、しかし未明文学全体を見渡すと、前者の無常観といったものは終生、詩的なりリズムを伴い流れているものであるし、また、後者の正義の思いも初期のころから一貫して流れているものが分

かる。

5

『上越市史(普及版)』(平成三年一〇月、上越市)に次の記載がある。太平洋側の近代化がもたらした日本海側市町村の資本収奪とは直接の関係はないが、未明が少年時代にみた高田の窮乏ぶりを示すエピソードとして紹介しておく。このエピソードはたとえば未明の小説「僧」などにも記されている。「明治三十(一八九七)年、三十一年、三十八年と水害が続き、多くの田畑や家が冠水し、青田川・関川・保倉川などに架かる橋もほとんど流された。その上、水害の後の伝染病も多発した。例えば、三十一、二年の赤痢患者は二〇〇人近くになり、うち二人が死亡した。さらに、三十八年には冷害にも見舞われた。／＼そのため、人々の生活は困窮し、町や村の財政もまた窮乏した。」(二一八頁)

*「眠い町」その他の童話本文は『小川未明選集第五卷』(未明選集刊行会、大正一四年二月)所収のもの、小説本文は『定本小川未明小説全集』(講談社、昭和五四年四月一〇月)所収のものを用いた。全集未収録の感想類は、初出誌紙に拠った。なお原文を引用するさい、旧漢字は新漢字に改めた。

(上越教育大学教授)